

生活の表出と関係性からみた戸建て住宅地における
オープン外構の実態と有効性に関する研究 その1

正会員 ○豊住由貴*
正会員 西原隆泰**
正会員 横山俊祐***
正会員 徳尾野徹****

オープン外構 エクステリア 住宅地
生活の表出

1.研究の背景と目的

かつて基盤の目のように整然と並んだ住宅はその狭い敷地を確保するかのようには塀で囲われていた。ところが近年塀や柵のない住宅(以降オープン外構と呼称)が増加している。これまで塀に守られていた人々の住生活が一転して外からの目線にさらされることになった。本稿では、オープン外構の住宅が戸建住宅の主流として大量に供給されていることから多くの住まい手が否応なしにオープン外構の住宅を選択している側面があると考え、外に対して開かれた前庭についてどのように捉え、実際に使いこなしているのかについて主に住まい手の視点から評価を元に分析を行う。その中でオープン外構の接道側の庭(以降、前庭と呼称)がどのように活用されているか実態を把握し、前庭が住宅地へもたらす影響、効果を明らかにすることを本稿の目的とする。

□オープン外構の定義 一般的に外構のスタイルは「クロード外構」、「セミクロード外構」、「オープン外構」の3つに分類されている。(表 1)計画時には塀や柵のな

い住宅であっても入居後に住民によって柵が設けられた住宅も存在する。これらの住宅は厳密には「セミクロード外構」に分類されるが、それも住民の住みこなしの一つの形であり、柵についても軽微なものであればオープン外構の住宅の範囲としている。

2.調査概要

調査は、関西圏の住宅地で生活の実態、及び住宅に対する評価についてアンケートを行った。活発に前庭の利用が行われている事例、宅地のルールが厳しく景観が良好に保たれている事例といった特徴的な住宅地7ヶ所の居住世帯 614 世帯を対象としている。(表 2)

3.オープン外構における前庭の使われ方

3.1 前庭のしつらえ 住民自身がしつらえた植栽についてその内訳を見ていくと、全体では鉢植え(54%)、樹木(49%)、プランター(42%)、芝生(22%)の順で多く見られた。前庭に置かれているものについては、居場所を形成するデッキやイス、テーブルが多いが、最も敷地の狭い住宅地Fではほとんど見られなかった。(図 3-1)

クロード外構	セミクロード外構	オープン外構
塀によって物理的、視覚的に閉ざされた住宅	軽微な塀や柵はあるが視覚的には内部の様子が伺える住宅	塀も柵もない物理的、視覚的に開かれている住宅

表 1 一般的な外構のスタイル

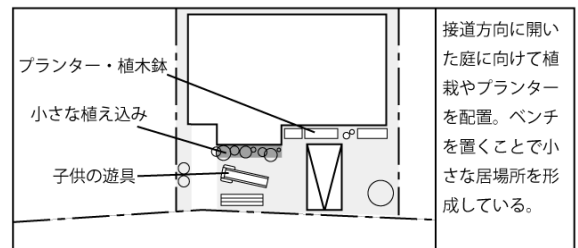


図 3-1 オープン外構の事例

表 2 アンケート配布住宅地概要

アンケート配布状況	住宅地名	住宅地 A	住宅地 B	住宅地 C
全住戸数 614 戸	①住戸数	①26 戸	①26 戸	①106 戸
配布数 480 戸	②竣工時期	②1989 年	②1990 年代半ば	②1991 年
回収数 257	③平均居住年数	③17.9 年	③11.6 年	③10.7 年
回収率 41.9%	④平均敷地面積	④235.76 m ²	④193.38 m ²	④461.46 m ²
	⑤住宅地の概要	⑤宅地内のルールにより庭に物を置くことが規制され、街路景観の維持がなされている。毎年 8 月にガーデンパーティーを開催。	⑤各住戸の縁が豊かで心地よい印象を与える。クリスマスのイルミネーションで一時有名になった。	⑤街並みを維持する為に多くのルールが存在し、家の外観や色彩だけでなく街並みを損なうものを置くことも許されない。
	⑥外観の特性、特徴的な活動、決まりごと等			
		住宅地 D	住宅地 E	住宅地 F
		①78 戸	①120 戸	①128 戸
		②2003 年	②2006 年	②2005 年
		③3.5 年	③4.3 年	③6.1 年
		④341.67 m ²	④160.59 m ²	④115.03 m ²
		⑤ひな壇構成された土地の上に様々なメーカーによる住宅が混在した状態で建設されており、外観デザインの統一感はない。	⑤敷地面積は日本の郊外型の住宅としては平均的な大きさ。植栽や飾りを感んで行っている様子が多く確認された。	⑤スタイリッシュな外観の住宅が目立つ。敷地面積は調査対象地の中で最も狭く、住宅間の距離も極めて近い。
		住宅地 G		
		①130 戸		
		②1998 年		
		③9.9 年		
		④180.50 m ²		
		⑤住宅地としての統一感はないが、それゆえに各々が各々の家の外観に合ったしつらえを行っており、多様なしつらえが見られた。		

A study on the actual situation and effectiveness of an open exterior at the detached housing area in terms of expression of life and relationship no.1

TOYOZUMI Yuki, NISHIHARA Takahiro
YOKOYAMA Syunsuke, TOKUONO Tetsu

置物といった場所を取らない装飾品に関してはどの住宅地でも高い割合を示している。装飾品を飾っている家はクリスマスに関するものがほとんどであった。その一方で特にないという家も多く、多くの家にとって庭のしつらはガーデニングの範囲で行われているといえる。

3.2 前庭の使われ方 前庭に置かれている生活関連用品では自転車、バイク、三輪車や庭用の道具等が多く、不用品や物干し竿のような生活のあふれ出しに繋がるものは置かないように意識していることがわかった。しかし、敷地面積の狭い住宅地 F ではゴミ箱が高い値を示しており、面積が狭いことによって本来は見えない場所に置いておくべきものが前庭にあふれていることが分かる。(図 3-2) 庭の使い方は基本的には草花の世話や駐車などが、敷地面積が大きくなると飲食や休憩などに使われる割合が増加する。(図 3-3)

4. 視線の有無が与える効果

4.1 装飾への意識 多くの回答者が外からの視線を意識しながら庭を使っている。視線の有無と、飾り方の関係を見たところ「非常に見られる」、「ある程度見られる」の回答者がそれ以外の回答に対して、装飾への意識が高くなっている。(図 3-4)

4.2 景観への評価 オープン外構が道沿いの景観に与える影響についての質問では、「非常に高めている」、「高めている」が 71%と極めて高い割合を示した。敷地面積の比較的大きな住宅地で特にこの傾向を示したため、敷地面積が狭いと各々の領域を確保することで精いっぱいとなり、目につくところに私的なものがあふれてしまうが、ある程度敷地が大きくなると住み手にも景観的要素を意

識する余裕が生まれることが考えられる。(図 3-5)

3.4 防犯性への評価 防犯性に対する評価では全体で 44%が「非常に高めている」、「高めている」を選択している。一方「非常に低くしている」、「低くしている」の回答は 11%と低く、オープン外構は外部へと開かれていることによって視線が通り、かえって防犯性を高めていると認識されている。

3.5 視線に対する考えの変化 外からの視線に対する意識がどのように変化したのかという質問に対して、「人目を気にしていたが、そのうち気にならなくなった」(25%)、「今も昔も視線を感じない」(30%)が多く、最初から気にしていない場合と、そうでない場合でも時間が経過するにつれて気にしなくなったという人が存在し、外部からの視線に対しては時間の経過と共に適応していくと考えられる。

4. 結論

オープン外構の居住者は外からの視線を気にしながらも日常の一部として受け入れている。住民には前庭は日ごろから整えておくべきであるという意識が存在しており、外に対して積極的に飾り付けを行っていることが分かった。このような近隣に向けての前庭を通じた自己表現は自身の生活の表出の一つの在り方といえ、オープン外構はその舞台として大いに有効であるといえる。また、視線が良く通ることによって、防犯面、景観面での評価も高い。このようなオープン外構の特性は狭小な敷地面積では発揮され辛い傾向がある為、オープン外構の特性を十分に発揮する為には敷地面積に対する配慮が必要であることが考えられる。

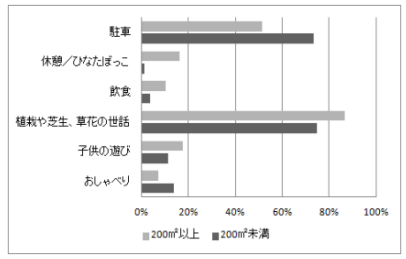
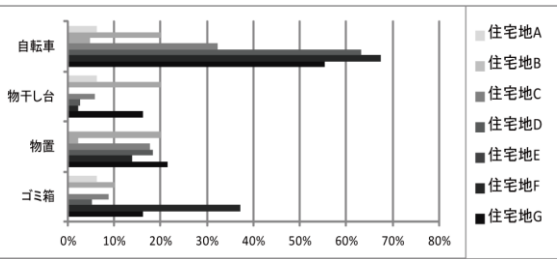
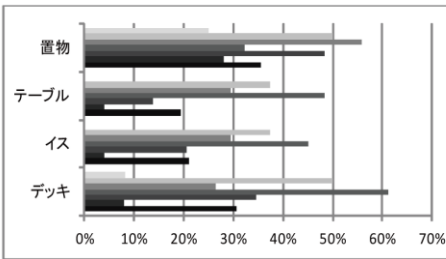


図 3-1 オープン外構に置いてあるガーデン用品

図 3-2 オープン外構に置いてある生活用品

図 3-3 敷地面積による前庭用途の比較

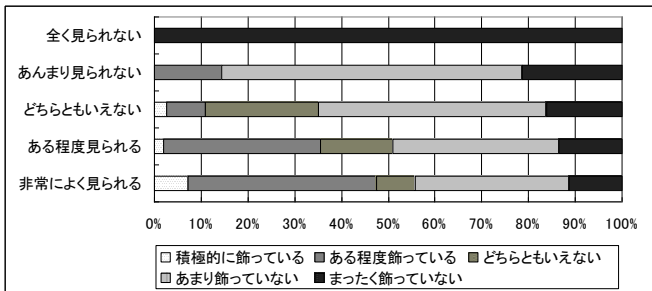


図 3-4 外からの目線の有無から見た飾りの程度

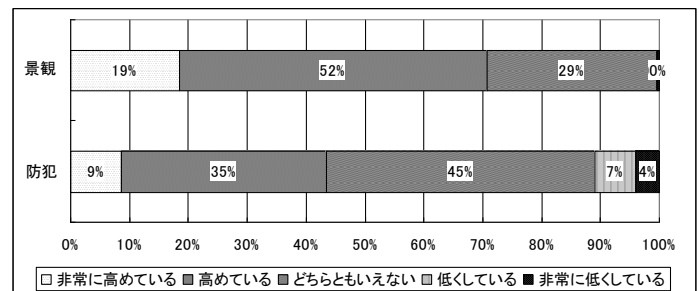


図 3-5 防犯性、景観に関する評価

*大阪市立大学工学研究科前期博士課程
 **大阪市立大学工学研究科前期博士課程
 ***大阪市立大学工学研究科 教授・工博
 ****大阪市立大学工学研究科 講師・工博

*Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 **Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 ***Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng.
 **** Lect., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng.